

---

# 異世界召喚された道化師（ピエロ）

葉藻阪 松園

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界召喚された道化師<sup>ビエロ</sup>

### 【Nコード】

N3276BA

### 【作者名】

葉藻阪 松園

### 【あらすじ】

異世界召喚されたごくごく普通の一般人である藤沢章が、子供の頃の夢であるサーカス団を創るために東奔西走しながら異世界を蹂躪する話。ある意味チート（呪い？）を貰った彼が、猫耳娘雑技団<sup>マジックショー</sup>や魔法公演や魔獣共の猛獣ショーを創ろうとはた迷惑な方法で努力します。ヤンデレなダークエルフやDMな吸血鬼少女や厨二病を患っている火を吐くライオン達を伴って彼が事件（犯罪？）を引き起こす。【注意】チート要素あり。少しシリアス気味で始まるけど、ご都合主義でハッピーエンド。最初是最弱だけど、だんだんチート

化。ちよつと前に投稿していたもの（異世界召喚された時の対処方  
法）と世界観だけ同じです。2012年1月10日にタイトル変更。

## プロローグ（前書き）

【注意】少しシリアス気味で始まるように見えるけど、ご都合主義でハッピーエンド。最初是最弱だけど、だんだんチート化。王道な異世界召喚もの。ちょっと前に投稿していたもの（タイトル同じ）と世界観だけ同じです。

## ブローグ

着飾った二人の男女と二つのブランコ。眩いばかりの電飾で、テントの内側に映し出された二人の影。

幻想的で森の中を思わせるゆったりとして澄んだ曲がピタリと止むと、あいつとあいつの相方の手が向かい合った二つの空中ブランコから同時に離れる。

観客全てが固唾を呑んで見守る中、二人は背筋を伸ばして回転しながら空中を移動する。

まるで止まった時の中を二人だけが動いているかのように。二人の距離は近づき、交叉した後再び離れ、あいつとあいつの相方は優雅に対面のブランコへとたどり着く。

二人がそれぞれのブランコの手をつかんだ瞬間、アップテンポの曲が流れたすのと、観客が歓声を上げるのが同時だった。

確かにあいつは一番輝いて見えた。

隣で見えていた親子連れの女の子もポップコーンを食べるのも忘れて、ずっとあいつの演技には見とれていた。

俺もあいつから貰ったチケットを握り締め、久しぶりに子供の頃のように興奮していた。

もうすでに夜の帳は落ち、ライトアップされ熱気を帯びたサーカス会場を出た俺は、すぐさま最寄りの駅へと向かう。

途中で信号に捕まり、なんとなく振りかえると如何にもサーカスだという白いテントがまだ視界に映る。

あいつと俺こと藤沢章は、いわゆる幼馴染だった。

家が隣でよくあいつやあいつの家族と遊びに出かけた。海や山や神社やお寺に秘密基地。

あのサーカス団にもその時出会った。そう10年以上前の今日と同じように蒸し暑い夏休みに。

俺とあいつは、当然のように魅了された。

ただ俺とあいつの選択は、ほんの少し異なっていた。

俺はもう一度見たいと思い、あいつはあれをやりたいと決意した。

それだけの違いだった。

その時の俺はできるわけないと反対した。運動神経も俺とほとんど変わらないあいつにできるわけないと…。

おそらく一番の親友がいなくなるのが怖いと思ったのだろう。

そして、おそらくあいつに置いて行かれるのが嫌だったのだ。

まあ、その小物臭漂う感情は今ではほとんど無くなった。

今ならはつきり断言できる。あいつの選択は間違っていなかったと。

あの時のあいつの選択は。

もし、俺があの時あいつと同じ選択をしていたら、今の俺はもっと輝けていただろうか…。それは無意味な疑問だろう。

あいつと違って、おそらく俺はこれからこのまま何となく生きていくだろう。

挑戦を嫌って、安全を優先して、生きていく。

これは俺の性格だから仕方ない。俺は石橋を叩いて、さらに他の人が通るのを確認してから橋を渡る人間だから。

確かにあいつが少し羨ましいが、これと言って今の生活に不満はない。典型的な脇役キャラだから。

何かとんでもない事件に巻き込まれない限り、俺はおそらくそうやって生きていく。

異世界にでも飛ばされない限りは…。

そんな時だった。人生で最も重大で理不尽で幸運で不幸な事件が俺に降りかかったのは。

ただ、その時の俺は、突然光に包まれて、余りのまぶしさに目を瞑らざるを得なかっただけで、何が起きているのか全く理解していなかった。



## プロローグ（後書き）

感想よろしく。

## 第一話：初めての奇跡と博愛神の加護

視覚が回復し少しづつ目が慣れてくる。

周りの情報が入って来るに従って混乱していくのが自分でもわかる。

目の前にあったはずのアスファルトの道路や車、そして向かいに見えてたコンビニやら全ての物がなくなっていた。

コンビニに入ろうとはしゃいでた子供も隣で一緒に信号待ちをしていたバカップルもみんな消えていた。

複雑にねじ曲がり、たがいに絡みあっている見たことのない異常に大きな木々がみえるだけだ。

そして、足元に血だらけの女と10mくらい先に黒いローブを羽織った奴が倒れているだけだった。

訳が分からず動揺する。

女は、黒髪で褐色肌の美人だと分かったが、耳が不自然に長く尖っ

ている。

空想上のダークエルフがいたらこんな容姿だろう。

現実離れた容姿に少し違和感を感じたためか、声をかけるのを一瞬躊躇われてしまう。

携帯電話を確認してみるが、なぜかというか、それとも、やはりと言えはいいのか、圏外だった。

とりあえず、不自然な耳への違和感より女の怪我の方が気になって話しかけることにする。

「大丈夫か？」

自分でもなんて間抜けな質問だろうと思う。

肩から腹にかけて大きく体が裂けて、血まみれだ。

大丈夫なわけではない。

だが、気が動転して他に言葉が出なかったからしかたない。

女性の脇にしゃがんでもう一度声をかけるが、美女の赤眼には生気がない…。

彼女の伸ばした手をおもわず掴む。

褐色の肌が激しく波打ち、血が傷口からあふれ出していく。

不規則で荒い呼吸が耳に纏わりつくように絡んでくる。

「誰かいらないか？怪我を治せる人！！！」

思わず叫んでしまう。

声が周りに木霊するだけで、誰からも返事はない。

あたりを見回すと、彼女の血がそこらじゅうに飛び散っているのに今更ながら気がついた。森独特の湿った臭いに澄んだ空気は、日本の森と変わらない。ただ、血臭が混じっているため、不快感が刺激され、さらに混乱を加速させる。

そのとき、頭の中に突然声が響いてきた。

『異世界人である藤沢章の召喚を観測しました。  
数奇の女神より奇跡ポイントが藤沢章に250ポイント贈られました。』

召喚事故を観測しました。

嘲笑の邪神より奇跡ポイントが藤沢章に50ポイント贈られました。  
藤沢章の合計奇跡ポイントは、300ポイントになりました』

ハッとして周囲を見渡すが誰もいない。

”異世界人の召喚”とは、どういう意味だろうか。

そのせいで、俺はここにいるのか？

”召喚事故”というのも聞き取れた。

そのせいで、彼女は怪我をしているのだろうか？

”合計奇跡ポイントが、300ポイント”。

何のポイントだろうか。

全く状況が掴めなかった。

「誰かいるのか？いるんだったら出てきてくれ！」

返事はない。

空耳だったのだろうか。

いや確かに聞こえた。それもはっきりと。

とても明るく、この状況に似つかわしくない澄んだ声が。

”嘲笑の邪神”やら”奇跡”やらと、この状況でふざけた単語を並べてくる声はつきり聞こえたのだ。

何もできない自分にも苛立つ。

しかもこの理不尽な状況をどうしたらいいか分からない。  
不満をどこかにぶつけたくなってさらに大声になってしまった。

「隠れてないで早く出てきてくれ!!」

女神だとか、神だとか、くだらないこと言ってる間があったら、怪  
我の治せる人のいる所まで彼女を運ぶの手伝ってくれ!  
それとも、あんたが治療できるのか!」

するとすぐさま、先ほどと同じ声が頭に響いた。

『藤沢章の願いに博愛神から返答がありました。

彼女の治癒には、奇跡ポイントが5000ポイントが必要です。

現在、藤沢章の奇跡ポイントは300ポイントであるため、奇跡を  
起こすことは不可能です。

ただし、藤沢章が”博愛神の加護”の付加を了承するのであれば、  
奇跡ポイント200ポイントの支払いで、彼女の治癒の奇跡を行な  
うとのことですよ』

何を言っているのか未だに訳が分からない。

しかし、治すと言っている。

博愛神の加護の付加を了承すれば、治すと言っている。  
奇跡ポイントとやらを払えば、治すと言っている。

そのことだけは理解できた。

褐色女の手が小刻みに震えているのに気付く。

このままだと、長く持たないのは目に見えている。

当然俺の返答は決まっていた。

「女神だか神だか何だかわからないが、治せるなら早く治してくれ  
！」

大声で叫ぶ。こんなに大声を出したのは、何年ぶりだろうか。

普段は大声を出さないせいかな咽そうになるのをこらえると、再度、  
どこからともなく頭に声が響いてきた。

『藤沢章の願いを受諾しました。』

対価として、藤沢章に博愛神の加護が付加されました。

さらに対価として、藤沢章は奇跡ポイントを200ポイント支払い  
ました。

藤沢章の合計奇跡スコアは、100ポイントになりました』

そんなアナウンスと同時に、腕の中の褐色女が突然光り出し、まぶ  
しくて思わず目をつぶってしまう。

目をゆっくりと開けると、だんだん目が慣れてくる。

完全に視覚を取り戻すと、褐色女の傷が完全に塞がり、静かに寝息を立てているのに気がついた。

自分に今何が起こっているのだろうか。

未だに理解できない状況だ。

ただ、褐色女の怪我が治ったのを確認して、俺の心も落ち着いたのに気がついた。

少なくとも今の状況を取りあえず整理しようと思えるくらいには、冷静に戻れたようだった。



## 第二話：奇跡ポイントと小さな決意

褐色長耳女の傷が完全に塞がり、目の前で寝息を立てている。

よく見ると、怪我だけではなく、服についてた血も跡形もなくなっており、拳句の果てに、破けてた服まで直っているようだ。

周りを見渡したが、彼女と倒れている胡散臭い真っ黒のローブの奴以外誰もいないようだ。

しばらく観察すると木の間に駆け抜ける影を見つけたが、どうもウサギっぽいものらしく、こちらに害意はないようだ。

ウサギっぽいものというのは、頭のとっぺんが鱗でおおわれて帽子みたいになってるから、ぽいものって表現しただけで、帽子ウサギって呼んだ方がいいかもしれない。

明らかに地球産ではないことが分かる。  
3mくらいの高さにジャンプでき、枝から枝に飛び移ってるのだから。

それから、時たま遠くから悲鳴とも鳴き声とも分らない音が聞こえたときには、心臓が停止するかと思ったが、少し混乱しつつも無理やり落ち着かせた後、明らかに捕食される側のように見える帽子ウサギがうろついている間は大丈夫と勝手に判断することにする。

それにしても俺に何が起こっているんだろうか。  
未だに意味がわからない。

とりあえず俺は今の状況を整理することにした。

異世界であることはほぼ確定だろう。

自称神様の言うことを信じるなら、異世界に召喚されたことになる。

召喚事故って言うてたからには、この長耳の褐色美女はそのせいで怪我をしていた可能性が高い。

そして、祝福ポイントとやらを払ったから自称神様が彼女の怪我を治してくれたみたいだ。

一番気になるのは、奇跡ポイントとは何なのかということだ。

経験値みたいなものだろうか。

召喚事故されたという訳のわからない理由で数奇の女神と嘲笑の邪神とやらが勝手にしてくれて、怪我の治すのに博愛神とやらに無理やり払わせられた感じだが…。

博愛なら対価とらずに勝手に直せよと思うのは、俺だけではないはずだ。

その時ついでに”博愛神の加護”とやらも俺にプレゼントしてくれ  
たようではあるが…。

しかしその”博愛神の加護”というのも意味分らない。  
何かいいことあるのだろうか。

まあ、誰かに聞けばそのうち分かるだろう。

この美人な長耳お姉さんが教えてくれると嬉しいんだが…。

調べなくてはならないことで山積みだ。

さて、これからどうしようか？

『藤沢章の願いに知識神から返答がありました。

この世界の全ての理を知るためには、奇跡ポイントが5000兆ポイント  
が必要です。

ただし、概要だけであるなら、奇跡ポイント5ポイントであなたの  
知りたいこの世界の概要をお教えすることです』

また、脳内神様が声をかけてきた。

こちらのことを逐一見張っているのだろうか？

とりあえず、5ポイント払うことにしてこの世界のことを聞くことに  
する。

分かったことは、次の四つだけだった。

1・ここは、トルマニアン帝国の幻影の森。

2・奇跡ポイントは、神様が気にいることをするともらえるらしい。しかもいろんな神様がいる。

3・奇跡ポイントを消費すると、奇跡が起こせるらしい。怪我治したり、スキルを覚えたり。ちなみに、魔法もスキルに入る。その奇跡に奇跡ポイントがいくらかかるのかを聞くだけならタダみたいだ。

1はこの際置いておこう。

とりあえず、突っ込みたいのは、2だ。

異世界召喚が気にいって”数奇の女神”が奇跡ポイントをくれたのはいいとして、召喚事故観測したからってポイントくれた”嘲笑の邪神”は一体何がしたいのか？

悪趣味としか言いようがない。本当に神様なのか？

ただ、3に関しては心躍るモノがある。そう、奇跡ポイントでスキルを覚えられる。

いろいろ試したところ、全ての魔法を使えるのに500億ポイント、全ての火魔法なら50億ポイント、マッチ程度の火を起こす魔法は50ポイントのようだ。残り95ポイントしかないのに興奮して使ってしまう所だった。

魔法以外のスキルを試したところ、魔獣使いに必要な全ての能力が50億ポイント、目の前ではねて飛んで行ったあの帽子ウサギ一匹

に限定した魔獣使いの能力だと50ポイントで取得可能とのことだった。

ちなみに、ピエロに憧れていたので、ボール乗りを聞いてみたら50ポイントだった。

今は奇跡ポイントは95ポイントしかないのですが、どうしようかしばらく悩み、とりあえず、長耳女さんが起きて話を聞いてから、もう一度考えようと結論付けた。

この時に、一つの決意が、人生で初めて俺の心の中に芽生えたことを、俺は後々気がつくことになった。

この世界で、サーカス団を結成してみようという決意が。

異世界に召喚されたことで気分が高揚していただけたかもしれない。魔法が使えることにテンションが上がっていただけたのかもしいい。

しかし、この世界では、ほんの少し挑戦をしてみようと、自分でも意外だと思ふようになっていた。

ほんの少しだけ、ほんの一欠けらの決意だったが、確かにこの時芽生えたようだった。

### 第三話：漆黒の美女と言語神の加護（改）

「うう」

長耳な褐色お姉さんから呻きが聞こえてくる。

目鼻立ちの整ったいわゆる典型的な褐色美女には、似つかわしくな  
いかわいい呻きだ。

少し心がいやされて、心が落ち着いてくるのか自分でもわかる。

これからは”長耳さん”と、さん付で呼ぶことにする。

褐色の肌に漆黒の長髪。スツとした鼻に、そして、先ほど見つめて  
きた？時に見えたくりつとした緋色の目。

その中でも、黒髪は特別目を引く。あまりにも黒いのだ。今まで日  
本人は黒髪だと思っていたが、彼女の髪を見てしまうと黒髪とは言  
えなかったのだと思えてしまう。彼女の髪に近づくとまるで全ての  
ものが吸い込まれていくブラックホールなのではないかと錯覚して  
しまうくらいに、鮮やかな黒なのだ。

その髪の中からぴんと突き出した特徴的な尖った耳に思わず触って  
みそうになるのを何とかこらえる。

服装に目をやると、どうやら上下とも革製のようだ。いわゆるレザ  
ージャケットとレザーパンツに一番近い気がするが、ジャケットは  
半袖だったりデザインは少し違和感がある。

スタイルは、日本人離れた滅茶苦茶いい体で、レザージャケット  
は一部がはちきれそうになっている。

まあ、日本人どころか地球人ですらないだろうが…。

それにしても、はち切れそうな部位は、すいかとは言わないが、メロンくらいはあるようだ。

そんな邪なことを考えていたためか、いつの間にか俺の手が彼女の胸を揉んでいることに気がついた。

一瞬自分が何をしているのか理解ができなかった。

気がついたら彼女の胸に手が伸びていたのだ。

全く意味が分からない。

いくらむつつりとはいえ、寝ている女の胸を揉むとかあり得なかった。

そんな度胸のある奴ではないことが自分が一番良く知っている。

どうしてしまったのかと混乱しているためか、すぐに手を離すという判断に遅れが生じる。

異世界召喚で体に変化が生じたのかと答えの出ない思考を巡らせていると、ピクリと長耳女さんが反応したのに気がついた。

どうやら彼女が目覚めたようだ。

俺の手が彼女の胸を揉んでいることを確認した瞬間、人も殺せそうな鋭い殺気を向けてくる。

長耳女さんが引きつった笑いを見せながら、俺の頭に手を伸ばしてくる。

細くて綺麗な手だなと全く関係ないことを考えながら現実逃避しているうちに、彼女の手が俺の顔面を鷲掴みにする。どうやらアイアンクローというプロレス技で俺に制裁を加えるようにしたようだ。最初は人ごどのように考えていたのだが、痛みで思考を遮られる。

長身の美女が立ち上がりながら、アイアンクロー状態で俺を無理やり持ち上げる。

「s d o i u o u a f a j j j a o j f a o j f a j o a  
i j o d i j f a o i j f a o j o a j o f j o a j o a f  
j f o j a s d f k f c z p v f j a d e i f j e i a o f j  
a o j」

美女がアイアンクローしながら喋ってくるのだが、何言ってるのか全くわからない。



分かったのは、アイアンクローの力が半端じゃないことだけだ。

女の細腕なのだが、滅茶苦茶力が強い。

こんなことで再確認しなくなかったが、ここはやはり異世界のようなのだ。

俺は足が浮いた不安定な状態で謝っているのだが、全く言葉が通じない。

俺は、命の恩人のはずなのだが…。

まあ、眼が覚めたときに胸揉んでる男がいたら、普通は犯罪者だと思っだろう。

少なくとも命の恩人とは思わない。

牢屋ではなくあの世に直行させられそうな勢いだ。

セクハラ痴漢行為で返りうちされた場合は、天国に果たして行けるのだろうか。

まあ、”嘲笑の邪神”という訳分からん存在がいるんだから、”痴漢の邪神”とかも居てもおかしくはない。

天国行きは大丈夫だろう。

邪神が天国にいるか分からないし、そもそも脳内神様かもしれないが…。

とりあえず俺の頭がい骨が限界だ。

さっきの脳内神様に喋れるようにしてもらえないのか。

あの怪我治せるんだったら、大丈夫だよな？

大丈夫のはず…。

そんなことを考えているとすぐに返事があつた。

『藤沢章の願いに言語神から返答がありました。

公用語ドーマ語スキルの付与には、奇跡ポイントが1000ポイントが必要です。

現在、藤沢章の奇跡ポイントは95ポイントであるため、奇跡を起こすことは不可能です。

藤沢章が”言語神の加護”の付加を了承するのであれば、奇跡ポイント50ポイントで公用語ドーマ語スキルを付与してくれるようです』

「ああ！ああ！何でもいいからそれで！

早く謝らないと、俺の頭が持たない！！！」

『藤沢章の願いを受諾しました。

藤沢章に公用語ドーマ語スキルが付与されました。

対価として、藤沢章に”言語神の加護”が付加されました。

さらに対価として、藤沢章は奇跡ポイントを50ポイントを支払いました。

藤沢章の合計奇跡ポイントは、45ポイントになりました』

「もう二度とおいたがでかねえ！ように私が手術してやるよ。

方法はとりあえず二つあるんで、ウジ虫のお前に特別に選ばせてやる。

てめえの腐った右手をゆっくりじっくり罨血虫に食われる方法と、

その腐った脳みそを頭搔っ捌いて、聖水で消毒する方法だよ。  
好きな方選びな！」

最初に理解した異世界言語は死刑宣告だった。

言葉が分かれば、人間だれしも分かりあえるよな？

彼女が人間かどうかはまだ分からないが…。

第四話：不気味な美人と不気味な微笑（改）（前書き）

2012年1月10日に改定しました。

#### 第四話：不気味な美人と不気味な微笑（改）

とりあえず彼女の誤解をつくことに成功したようだ。  
ただ未だに警戒してか少し離れて喋っている。

胸を揉んでいたのは誤解でもなんでも買いかから仕方がないが。

美人のお姉さんとマンツーマンでお話できる日が来るとは思いもしなかった。

まあ、お姉さんというより姉御って感じなんだけどな。

しかもヤンデレ。デレてはいないが、病んではいる。

何が言いたいかと言うと、彼女は本当に口が悪い。

最初は怒りで言葉が汚くなってるのだと思ったが、どうやら素で口が悪いようだ。

この世界の人にとっては当たり前なのかもしれないが、さっきから俺の繊細な心臓が悲鳴をあげている。

しかも、時折見せる笑い顔が本当に気味が悪い。

美人がにやけながら毒を吐いてるせいなのか、俺の心の中で拒否反応が起こっている。

最初に笑顔見た時、背筋が凍った。凍ったという表現が正しいかどうか分からないが、普段意識していない背中の感覚器官の感度が異様に上昇して、冷たいという情報を脳に発信しまくっていた。

それでも浮世離れた美貌のせいで嫌うことはできないのだが。

美人でなければ、いくら痴漢した負い目があるとはいえ今頃俺は切れていただろう。

彼女の名前は、加奈さんというようだ。

本名は、加奈・ヴァレンダン・夏目って名前らしいからそう呼ぶことにした。

なんか日本人のハーフみたいな名前だな…と思ったら、大和国人の父親と闇の妖精族ダークエルフの母親の子供とのこと。

それとやはりと言えいいのか、異世界らしくダークエルフで合っていたようだ。

そんなわけで、今はそんなことよりハスキーボイスでヤンデレ？な姉御と重要なお話し中だ。

「で、ウジ…、くそ虫は異世界から来たと…」

なぜ言い直すのか分からないが少し評価を上げてくれたのだろうか  
と勝手に好いように解釈して肯定する。

「おそろく」

「くくつ、顔は平平凡凡、体も風折草より貧弱で、何の取り柄もないくそ野郎なわりに、境遇だけは変わってるね」

痴漢した俺が悪いからこのくらい言われるのは仕方がないと、とりあえず自分に言い聞かせて、平静を装ってスルーすることにし、話

を続ける。

「なんで俺ここにいるか分かる？」

「おそらく、その胸の小さいお嬢ちゃんが召喚したんだろ」

「お嬢ちゃん？」

「あそこに転がっているアバズレだよ」

余りにも怪しかったので放置していたローブが少女だと知り、慌ててローブに近づく。

地面と見分けな着かない黒色のごつごつしたローブに近づくと、柑橘系の香水が何かの匂いがする。

どうやら本当に女性であるようだった。

俺は初めての異世界召喚体験中で気が動転していたので、すっかり忘れていたのは不幸な事故で仕方がないということで、うつぶせの少女には許してもらうことにする。  
黒いローブ羽織っているから女の子かどうかはまだ確定してはいないが…。

いつまでも地べたに口づけは可愛いそうなので、ひっくり返してあげることにした。

ローブを持ってひっくり返すと、どうやら、スレンダーな少女であることが分かる。

スレンダーというのは、軽いことから判断した。  
決して、胸を触ったわけではない。

異世界人だからといって、体重が重い訳ではないようだ。力は遥かに強かったが。

未だにこめかみがジンジンする。  
アイアンクローから解放されてだいぶ経つのだが…。

顔が見えたことから、ローブの女は17歳くらいの少女であることも分かった。

透き通る白い肌。ローブから覗く真っ赤な髪。細身でそこそ長身の少女だ。それから、ピンクのかわいい小さな唇に小さなつんとした鼻。おそらく相当もてるだろう。

異世界のかわいい基準は分からないが、地球では100人いたら99人はかわいいと言うはずだ。

100人といわず99人にしたのは、知り合いに1人かなり偏った趣向の友人がいたからで、特に深い意味はない。

ローブを羽織ってるので、尻尾はあっても分からないが、加奈さんみたいな長耳ではないようだ。



残念ながら、少なくとも猫耳はなかった。

フード被っていたのになぜ分かるのかと質問がありそうだが、頭のフードを一旦取って確認したのだ。

エルフがいたんだから、猫耳娘がいるかもと少しだけ夢見てしまったのは、仕方がないだろう。

フード取って得られた情報は、やはり美少女だと言うことくらいだ。異世界で会った二人が二人とも美人って異世界に来てよかった。それとも自称神様が主人公補正でもくれたのだろうか。

あと、メチャクチャでかいサングラスをかけたメチャクチャ怪しい少女であることも分かった。

なんで、こんな大きいのをつけてるのだろうか。

流行ってるのか。

それとも有名人だったりするのか。

異世界センスは理解できない。

そんなことを考えていると、自分の手が少女の胸に置かれているのに気がついた。

まただ。

また、いつの間にか揉んでいた。

何をととは言わないが、加奈さんより少し自己主張の足りないふくらみを揉んでいた。

俺はいつたいたんだろっか？

「これは傑作だね。くそ虫は、もしかして」博愛神の加護」持ちか  
い？」

混乱している俺に蔑んだ目を向けながら加奈さんが質問してくる。

加奈さんが知ってるってことは、奇跡ポイントというのは、誰でも利用できるシステムのようだ。

どうやら脳内神様でも自称神様でもないらしい。

「えっ、知ってるの？」

加奈さんの治療の対価に”博愛神の加護”を付加させるって、突然頭に声が響いてきて…。

”博愛神の加護”  
「って何なの？」

「くそ虫が直してくれたのかい。どうやら唯の糞虫じゃあないみたいだね。礼を言うよ。」

[illegible]

加奈さんが一瞬目を見開いたように見え、その後、狂ったように笑いだす。

何がそんなに可笑しいのだろうか。  
美人と言えどさすがに引く。

「いえいえ。困った時はお互い様なんで」

頭を振りまわしながら笑い続ける相手に聞こえているかどうかは分からないが、無難な返答をしておく。

しばらく笑い続けた後、少し落ち着いたのか、息を整えながら加奈さんが話しかけてきた。

「はっ、はっ、はっ、はっ、ひっ、ひっ、ふっ、ふっ、はっ、はっ、ふっ。

糞虫は、腐った変態というより、逝かれた変人のようだな。

私の体見ても何とも思わないみたいようだしね」

体とはどういう意味だろうか。

体より言葉の方が俺の心を壊しているのだが…。

こつちの世界では気にする容姿なのだろうか。

もしかして長耳のことかな…。

多少の欠点など美人ということの前には、些細なことだと思っただが。

むしろ、欠点があつた方が可愛く見えたりする。

加奈さんが興味深そうににやけながら少しこちらを観察した後、思い出したように加奈さんが話を戻す。

「そっぴや、くそ虫の”博愛神の加護”のことだけど…」

明らかに笑いを堪えようとしている加奈さんが言葉を続ける。

「おそらくいつの間にかセクハラしてしまう加護だよ…」

加奈さんは、にやけながらこちらの反応を伺っているようだ。  
俺は彼女が発した言葉に理解が追いつかず、少し固まってしまっていた。

第五話：“加護”のマイナスと彼女がヤンデレな理由（前書き）

すいません。

本日（2012年1月10日）に第3話の最後と第4話のほとんどを改訂しました。

キャラが薄すぎると言われて、それもそうだなと、加奈のキャラをヤンデレ？に変更しました。

改定版（特に第4話）を読んでいないとこの話から意味が分からなくなると思われます。

ご迷惑をおかけします。

それからお気に入り登録してくれた方ありがとうございます。  
では。

## 第五話：“加護”のマイナスと彼女がヤンデレな理由

「加奈さん。もう一度言ってくれないか？」

異世界召喚のせいで、耳が悪くなってるみたいだ…」

セクハラに加護という幻聴が聞こえてしまったようだ。  
異世界召喚って怖いな。

「いつの間にかセクハラしてしまう加護だよ。」

加護が発動する条件や効果は、個々で違うみたいだから、細かいこと知りたけりゃあ、くそ虫が知りたいって願えば答えてくれるよ」

聞き間違えではなかったようだ。

深呼吸して、加奈さんのアドバイス通りに自称神様に尋ねると、心の中で質問するとすぐに答えが返って来る。

『藤沢章の質問に博愛神から返答がありました。』

藤沢章に付加されている”博愛神の加護”とは、女性をかわいい又は綺麗だと思ったときに、女性特有の部位をいつの間にか撫で回してしまう加護です。

なお、相手への魅了の効果は、一切含まれておりませんので気をつけるようにとのことです。』

無情なアナウンスが頭に響いてきた。

かわいいと思つた瞬間に撫で回してるとか。

どうやら俺は町を歩くことすらできないようだ。

一体どの辺が加護なのか神様に問い詰めたくなる。

そういえば、言語神の加護も貰つてたよな。

そっちは大丈夫だろうか？

言語神ということは、誰とでも話せるようになる加護だろうか。

そうすれば、魔獣とも話せるし、もしかしたら簡単に魔獣使いになれるかもしれない。

そしたら、俺でもこの世界でサーカスが開ける。

「しかも、言語神つてことだから、喋ったことが現実になる言霊の効果もあるに違いない」

『藤沢章の質問に言語神から返答がありました。藤沢章に付加されている”言語神との加護”は、考えていることを思わず喋ってしまう加護とのことです。

妄想している場合に高確率で、口から洩れてしまいます。

しかも、妄想が増大されるという特典付きとなっているようです。また、妄想が実現することは一切ないので気をつけるようにこのことです』

どうやらこちらの神様は、マメに返答してくれるらしい。

余り聞きたくない答えだったが…。

もう一つも役にたたないどころか、害にしかない加護のようだ。特に妄想増大がいらぬ。

加奈さんもいつの間にか憐れみの表情になつて。

どうやら”言語神との加護”についても何か知っているみたいだ。

まあ、さっき思いつき妄想口走ってしまったし、こんな訳の分からない加護が存在していたらみんな知ってるだろうしな。

よくよく考えれば、対価として付加されたんだから、役に立つ加護なわけない。

数分前の浮かれてた俺を殴ってやりたい。

それにしても、神様は、なんでこんな意味の分からない加護を創ったのだろうか。

理由分かったところで俺には関係ないだろうが…。



そういえば、人によって効果が違うつてことは、もしかして…。

「加奈さんも言語神の加護を？」

一瞬驚いた表情を見せた加奈さんだが、また、背筋の凍る笑みを浮かべた後返答してくる。

「ウジ虫のくせに、いっぱしの思考はできるみたいだね…。

そうだよ。私も”言語神の加護”持ちさ。

ただし、私の加護は、人を不快にさせる言葉を発してしまうつても  
のだけどね。

加護で私の笑った顔も不快に感じるようになってるみたいだし、その上、沈黙していると強制的に不快な笑顔になってしまう特別仕様を、偉大で気がきく神様はつけてくれたようだよ」

どうやら、加奈さんの口が悪さと不気味な微笑みは加護のせいらしい。

加奈さんもかなり苦労していそうだ。

かなり笑顔が引きつっている。引きつっているのは加護のせいかもしれないが、今の俺には判別できない。

とりあえず、俺の異世界人生はマイナスからのスタートになりそう  
だということだけは理解した。

第五話：”加護”のマイナスと彼女がヤンデレな理由（後書き）

途中での変更で迷惑おかけしました。

## 第六話：召喚事故と赤髪少女

「いつまでイジケルてるつもりだい？  
軟弱なのは、体だけじゃなく心もなのかい？」

しばらくして、悪いと思ったのか、いつの間にかにやけ顔ではなく  
なった加奈さんが声をかけてくれた。  
いじけた俺の精神が回復するのをしばらく待っていてくれたようだ。  
さすが姉貴だ。

ただし、彼女の言葉でさらに心に傷を負ってしまったが。

「ああ…。」

そういえば、なんで怪我を？」

とりあえず、話題を変えようと思って切りかえす。  
これ以上精神に負担をかけたら鬱になりそうだ。

召喚の失敗で怪我してたのだろうと予測をしてはいるが、もし敵が  
いるのだとしたら危険であると判断し、一応加奈さんに尋ねること  
にした。

「そのクソガキが私に向かって召喚をかけてきたんだよ。  
普通、召喚ってのは、何も無い空間に向かってするんだけどね…。  
まあ、時空のひずみか何かで体が裂けてしまったんだろうね」

ここにきて新たな事実判明する。

どうやら赤髪美少女が加奈さんのいる場所へ故意に俺を召喚したせいで、怪我をしていたようだ。  
召喚の失敗ではなかったらしい。

それにしても加奈さんは、殺されかけてたのにノリが軽い。  
異世界では常識なのだろうか？

「召喚って危険なのか？」

「おやおや、やっぱり頭にウジがわいているのかい？  
普通はそんな使い方するわけないだろ。

召喚には奇跡ポイントもかかるし、特に異世界からの召喚なんてかなり対価を払われるだろうから。

普通の攻撃魔法なら、一度覚えれば奇跡ポイントもいらないし、対価の要求もないし、そっちの方が遥かに効率がいい。

脳みそ持ってりゃ誰でもわかることだろう？」

加護のせいだと分かっているても、美人に悪口を言われると少しへこむ。

深く考えずに話を続けることにする。

「どうして召喚を？」

「私を知るわけないよ。会ったのも初めてだし、こっちが聞きたいくらいだ」

どうやら加奈さんと赤髪少女は知り合いではないらしい。

それにしても見知らぬ他人が突然攻撃してくるとは、ここは危険な世界だと改めて認識する。

「そういえばこれから行く所もないなら、私の家に来な？」

それとも、この森で野たれ死にたいかい？

ウジ虫がいくら野たれ死のうがどうでもいいけど、臭い死体を私の活動範囲で晒されると不愉快だからね。

特別にウジ虫を飼ってやるよ。

それに、ここがどんな世界か知つといた方がいいだろう？。」

異世界で最初に出会った人が加奈さんみたいないい人であることにほんの少しだけこの世界の神様に感謝する。

加奈さんはいつの間にかセクハラも許してくれたようだ。

口は悪いけど。

「いいのか？」

「ああ。もちろん。それじゃあ、その雌豚を私の家まで運ぶの手伝いな！」

加奈さんは赤髪少女を指さしながら、家まで運ぶのを頼んできたので、危険はないのかと疑問に思っ**て**質問をする。

「殺されかけたのに、大丈夫か？」

「ああ、餓鬼は餓鬼で使い道があるからね……」

加奈さんの赤眼が舐めまわすように、赤髪少女の肢体に視線を這わす。

何をさせるつもりなのだろうか…。

俺は、ついてく人間を連れてるのかもしれないようだ。

## 第七話：魔法と奇跡と少しデレ？

赤髪少女を担いで加奈について行く。

加奈と呼び捨てにしているのは、一緒に来るのならそう呼んでくれと頼まれたからだ。他人行儀は嫌らしい。ちなみに加奈の呼び方もウジ虫からあんたに格上げされたようだ。どうも相手に対する猜疑心の大きさで呼び方が勝手に変化するらしい。初対面の男は大抵ウジ虫になるようで、何とも微妙な加護であることを再確認した。

突然飛びさしてくる当たつても全然痛くのない角の生えた蛙をよけつつ、しばらくは巨大な木々の間をすり抜けた後、背丈より高く意外にもろい乾割草というらしい茂みをなぎ倒しながら草原を進んでいく。

再び森林に入り、少女を担ぐのにも、物珍しいこの世界の風景にも慣れてきたので、この世界のことについて加奈に質問することにする。

通貨やら風習やらと他にも加奈に聞かなければならないことはたくさんあるが、どうしても最初に聞きたいことがあった。

それは魔法についてのことだ。

折角の異世界だ。これを聞かねば始まらない。

単純に使ってみたいと言うのもあるが、サーカスでのマジックショーにはあると全然違うだろう。

それにサーカスがすぐに開けず他の職に着いたとしても、おそらく必要になって来るだろう。

加奈を見て分かったことだではあるが、どう考えても体力的には俺はこの世界の人と比べて劣っている。

格闘技の経験もないので、何か不測の事態があった時に少し不安が残る。

そういったことに対処するには、魔法しかないだろう。

そついう結論に至り、加奈に聞くことにする。

「魔法とスキルは何が違うのか？」

「うん？魔法？」

まあ、暇だから特別に教えてやるよ。ただし、一度しか言わないから、その貧相な脳みそに気合で詰め込みな！

魔法ってのは、スキルの一種だからね。

光、闇、火、水、土、風の精霊神様を6大精霊神って呼ぶんだけど、6大精霊神に係するスキルを魔法って呼ぶだけだよ。

だから、スキルと同じように奇跡ポイントで覚えられる。いくら異世界人とはいえ、そんなに持つてるだろう？

精霊や妖精族は、もともと使えるけどね。

あんたの場合は、使いたい魔法を願えば、魔法を取得できるよ。

それで、一度取得した魔法は、制限がなければいくらでも使えるよ。



うになる。  
分ったかい？」

「じゃあ誰でも魔法を？」

「誰でもってわけじゃない。  
魔法の取得ポイントは高いし、普通の人は、裁縫スキルとか料理スキルとかにポイントを使ってる。  
私みたいにな」

加奈が普通と聞いて少し戸惑う。異世界の人は超人だらけなのだろうか。

疑問が顔に出たのか加奈が話を続ける。

「まあ、私の場合長いこと山の中で一人で生活してたから、多少身体強化にもポイント使ったよ」

どうやら、それで力が強いようだ。  
ということは、俺も身体能力無双できるのだろうか？

「どのくらいポイント使ったら俺は加奈ぐらい強くなれると思う？」

しばらく考えてから加奈から返答がある。

「うーん。あんたには無理だろうね。」

私は高貴な闇の妖精族だから元々身体能力高いし、身体能力の強化にかかるポイントも少なくて済むからね。

平凡な通常人には無理だと思うよ。あんたは異世界人だけど、通常

人と体力的にも変わりなさそうだし…。いや、それどころか、あんたはライオン族のくしゃみで吹き飛びそうなくらい貧弱だし、何の取り柄もない通常人より軟弱に見えるね」

だんだん加奈の口の悪さに対するスルースキルが身についてきたように、重要な所だけ聞きとれるようになってきたような気がする。とりあえず、気になったのは、ポイントが少ないとはどういう意味なのかという点だ。

人によって違っていてことなのだろうか。

「ポイントが少ないってというのは？」

「例えば、私は選ばれた闇の妖精族だから、戦乱の神や闇の精霊神には気に入られていて、それに関係するスキルの取得にかかるポイントは少ない。

けど、くそ忌々しい光の精霊神には嫌われているせいか光の魔法に関係する魔法の取得は難しい。

取得するためのポイントが高すぎてね。

何の特徴もない通常人の場合は、どれも平均的な覚えやすさだけだね。

異世界人は分らないがね…」

なるほど、種族によって覚えやすいスキルとそうでないスキルがある。

ポイント少なくて、強力なのがいいな…。

異世界人は何か得意な物はあるのだろうか。

「なんだ？もしかして、冒険者になるつもりかい？  
やめといた方がいいよ。」

毎日知り合いが一人は死んでいく危険な職業だ。  
猫より貧弱なあんたにその才能があるとは思えないね」

「そういう訳ではないが、いつまでも加奈の世話になるわけにはい  
かないからな…。  
それに普通の職業でも一つぐらい攻撃スキル持っていないと、この世  
界は危なそうだ」

見知らぬ他人がいきなり攻撃してくるくらいだからな。

「そうかい…。」

でも魔獣を倒せるくらいの攻撃スキルつてのはすぐに覚えられるわ  
けじゃない。

一人前の冒険者の使う攻撃スキルは約100ポイント、そこそ有  
名な冒険者は200ポイントくらいスキルにつき込んでるらしいね  
…。  
…。

悪かったね…。

あんたに下劣で下等な下心があったとはいえ、私を治すのに200  
ポイントも使わせてしまつて…。」

加奈はポイント使ったのをずいぶんと気にしているようで、申し訳  
なさそうにこつちを見ってくる。

相変わらず口は悪いが…。

200ポイントは、結構なポイントだったようだ。

ここまで親切？にしてくれるのは、そのためだろうか？

まあ、必要経費と思って200ポイントくらい諦めよう。

異世界情報を一目でかなりゲットできたし、口は悪いが美人と知り合えたしな。

ポイントなんて、また貯めればいい。

とりあえずどのくらい時間がかかるのか聞いておくべきだと考え質問する。

「奇跡ポイントって貯めるのに、どのくらいかかる？」

「一流になる冒険者は、1年かけて10ポイント貯めると聞くね。もちろん、どのくらい神様に気に入られることをしたのかで、年数は変わるけどね」

一年で10ポイント？

そんなにかかるものなのだろうか？

そこそ有名な冒険者のスキルが200ポイントだから、20年…。いや、52ポイントあるから、後15年くらいか…。

普通にやってたら、今すぐ、俺無双は難しそうだ。

何とか裏技はないのだろうか？

というか、その間、冒険者の奴ら何してるんだ？

「スキルが手に入るまで、冒険者は何を？」

「そりゃあ、冒険者だね。

最初に、簡単に発展性のあるスキルを考えて、それを10年かけて強化していくんだよ。

そうすれば、ずっと冒険者をやれるし、スキルポイントも無駄にならないからね」

なるほど…。

冒険者は脳筋だと思っていたが、いろいろ考えているようだ。

「速く覚える方法はある？」

「は〜。

その足りない頭でちよつとは自分で考えな！

私が海より広い心を持っていてよかったね。

今回は教えてやるから、耳かっぱじってよく聞いときな」

よく加奈を観察しているとだんだんわかってきたが、口は悪いが顔が申し訳なさそうに少し引きつっているようだ。

まあ、好きで悪口言ってる訳ではないから当然かもしれないが…とそんなことを考えながら、加奈の話の続きを聞くことにする。

「スキルに多くの制限をかける方法があるよ。

一年に一回しか使えないとか、10分間詠唱時間がかかるとか…。

そういった制限をかければ、比較的小さなポイントでそこそこの強力なスキルを最初から覚えられるからね。

冒険者の場合は、そういう制限を最初にかけておいて、ポイントがたまったらポイントを使ってどんどんその条件を無くしていくって方法をとるんだよ。

どちらの方法が速く使いものになるかは、スキル次第だろうけどね」

一年一回か…。

まあ、命かった時の必殺技みたいな感じが…。

10年後か20年後には、制限を取っ払えて何回でも使えるようになるわけか…。

「他に裏技見たいのあったりとかは？」

「裏技かい？」

姑息なあんたらしい思考だね。

誰でも知ってることだが、神様に気に入られるって意味では、加護持ちになるって手もあるね。

あんたの場合、”博愛神の加護”と”言語神の加護”を持っているから、博愛神と言語神に係るスキルはかなり取得しやすいはずだよ」

なるほど。いいことを聞いた。

加護持ちだとそれ系の能力の取得ポイントが少なくて済むのか。

だが、博愛神と言語神は攻撃スキルがあるのだろうか。

「加奈は、博愛神と言語神の攻撃スキル知ってる？」

「直接攻撃スキルは、余り聞いたことないね。」

博愛神の加護持ちで有名なのは、昔いた伝説の神父兼冒険者のガレニア・レバンドフスキーの拳闘友愛っていうスキルが有名だけどね。何でも半径100メートル以内に存在する武器がすべて破壊されて、攻撃スキルもすべて無効化されるとんでもないスキルだったらしいよ。

殴りあいでも分かり合おうとした腐った思考の変態神父だったらしいね。

まあ、その変態神父はライオン族の獣人だったから何とかなるスキルだけど、病人より貧弱なあんたが使っても殴り倒されて終わりだろうけどね」

博愛神使えないな。

そいつが一番有名ってことは、他の奴らはそれ以下のスキルってことか？

まあ、博愛神なんだから攻撃スキルあつたら困るよな。

「他にいる？有名な人」

「他にかい？うん。」

確か50年くらい前に、言語神の加護持ちで確かアマラス闘技場で序列3位までいった男が居たらしいね…。

まあ、余りにも下らない奴に思えたから、名前は忘れたけどね…。」

闘技場で序列三位。

それは期待できるかもしれないな。

「どんなスキルだったんですか？」

「人格口撃と精神的<sup>トラウマ</sup>外傷口撃だったかな？

詳しくは分からないけど、一対一では無敵だったらしいよ。

ただ、一度に一人にしか使えない制限があるらしく喧嘩は弱かったようだね。

闘技場では最強だったらしいが、そいつが一位になる前に観客から反対運動が起こって首になったけどね。

よほど卑怯な奴だったんだろね。」

な、なるほどな…。

すごく微妙だ。

まあ、口撃っていうくらいだから、悪口言うだけの能力なんだろう。トラウマえぐるような。

格闘技見に来て、マイクパフォーマンスで決着が着いたらそら観客怒るよな。

というか、そいつ何のために闘技場行っただ。



「そうそう、6大精霊神の加護の付加はやめておきなよ。

6大精霊神の加護は、全て10年以内に死んでしまうからね。

例えば、火の精霊神の加護は、加護持ちになってからちょうど10年後に体が燃え尽きるって効果があるからね。

代わりに、少ない奇跡ポイントで強大な火の魔法を覚えられるらしいがね。

まあ、あんたが一匹燃え尽きるのはこの世界のためになるだろうから、無理に止めはしないけどね」

燃え尽きる…。

そこまでして、俺無双はしたくないな。

聞いておいてよかった。

知らなかったら、”火の精霊神の加護”なんて、もろ主人公が持つてするような名前の加護だから無条件でOKしてたな。

もしかすると、俺のセクハラの加護と妄想の加護はましな方だったのかもしれない。

「加護ってなんでそんなにマイナスなモノばかりなんだ？」

「さてね。神様の考えることは分からないが、人間がマイナスな加護をあえて欲しがるってことは、それだけその神様を信仰してるって証になるからじゃないのかい。

死をかけてでも欲しがるものは、特にね」

『いじわるしても信じてくれる人は、私を愛してくれてるってことね』ってことか??

納得できるような。できないような。

なんか人間臭い神様だな…。

加奈がふと俺が背負っている赤髪少女に目を移す。

「その胸の小さいお嬢ちゃんはおそらく”火の精霊神の加護”持ちだろうね」

「この子が？」

「ああ。髪が真っ赤だからね？」

火の妖精族エルフならともかく、平凡な通常人でそこまで髪が赤いのなら間違いないね」

マジでか…。

この子可愛い顔して、とんでもないものに手を出してるな…。

加奈の同じでヤンデレ化しそうだ。

俺のハーレム要員候補なのに大丈夫か？（【注意】完全な妄想です）

ふと、俺の耳に少女の息がかかっていることに気づく。

かわいいな…。そう思ってしまった。少女に背中に背負いながらも、できるだけ彼女のことは考えないようにしていたのだが、少女の話を振られたせいでそちらに意識が向かってしまった。

気がついた時には、ロープの上から赤髪少女の太もも当たりを持っていた俺の手が、いつの間にか、彼女のお尻の方へ移動していた。柔らかいお尻へと。

背中に背負っているので赤髪少女は見えないから大丈夫だと思ったんだが。

どうやら”博愛神の加護”は対象が見えてなくても、かわいいと思っただけでも発動するみたいだ。

それと、撫でまわしてしまう”女性特有の部位”っていうのは、胸だけでなくお尻も含まれるというのが分かったことも今回の失敗の収穫だ。

最初から、きちんと説明しとけよな。

まあ、しまったと思いいながら、『マシュマロ並みに柔らかいな』と妄想漏洩した瞬間、顎に加奈のアップーをくらったようだ。

パンチが消えるとういうのを初めて見た。見たというのは少し語弊があるが、おそらく加奈の位置的にアップーだろうと予測しただけで、実際には顎に衝撃があつたのに気付けたただけだ。

さすが異世界。

加奈は力が強いだけじゃないみたいだ。

『藤沢章の変態行為への懲罰で失神を観測しました。

嘲笑の邪神より祝福ポイントが1ポイント藤沢章に付与されました。藤沢章の合計祝福ポイントは、46ポイントになりました』

意識が飛ぶ瞬間、そんなアナウンスが聞こえた気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3276ba/>

---

異世界召喚された道化師（ピエロ）

2012年1月10日19時57分発行